

武庫川学院創立70周年記念シンポジウム

卒業生によるパネルディスカッション

女子大学で学ぶとは

パネリスト：本仲 純子（薬学部卒・徳島大学大学院教授）
木村 泰子（短期大学体育科卒・大阪市立南住吉大空小学校校長）
稲村 和子（家政学部卒・奈良県文化観光局文化課課長）
佐守 香里（音楽学部卒・レイドバックミュージックスクール声楽講師）
伊覇ゆかり（短期大学人間関係学科卒・キッザニア甲子園デパート
パビリオンマネージャー）

コメンテーター：高橋 裕子（津田塾大学教授・研究支援担当学長特別補佐）

コーディネーター：安東 由則（武庫川女子大学教授・教育研究所研究員）

学 生：後藤 早紀（武庫川女子大学文学部健康スポーツ科学科4年）
新井 菜月（武庫川女子大学生活環境学部情報メディア学科3年）

シンポジウムの目的

〔安東由則〕 コーディネーターを務めます、教育学科の教授で、教育研究所研究員の安東と申します。よろしくお願いいたします。

高橋先生のご講演を受けまして、パネルディスカッションに移ります。テーマは、シンポジウムのテーマどおり「女子大学で学ぶとは」ということです。

主催者の立場から、このテーマ設定について一言説明を申し上げます。

女子大学に限らず、大学の主役は学生です。その学生にとって最も重要なことは、大学における学びではないかと考えます。近年、盛んに各大学でFD（Faculty Development）が行われておりますが、これも学生の学びの充実を目指すということが第一の目的としてあります。文部科学省の各種GP（Good Practice）もまた、各大学が創意工夫して学生の学びを促進しようというものです。

今日、大学にとって学生の学びをどう深め、どう広めていくのかということ、従来にもまして大きな課題となっております。そうした大学での学びという共通の課題の上に、ここでは、女子大学だからこそできる学びとは何なのか、あるいはそうした学びを推進していくために女子大学は何をすべきか、ということについて検討をしていきたいと考えました。ここで言う学びとは、学問や授業ということだけではなく、学生間の交流あるいは教職員との交流を想定した、幅広い学びというふうに捉えております。

こうした広い学びを捉えるために、5名の本学卒業生にお集まりをいただきました。本学院は今年で創立70周年、大学は創立60周年を迎えます。現在、本学では4年制大学で4学部、13学科、8,000人、そして短期大学は7学科で2,000人、合計1万人の学生が学んでおります。卒業生の数は、短大が10万人、4年制が6万人を超えています。また、学部、学科構成も、伝統的な日文や英文といった文系から、建築あるいは薬学といった理系まで非常に幅広い領域に及んでおり、その幅広さが武庫川女子大学の特色でもあります。

今日のパネルディスカッションには、異なる領域、幅広い年齢層の卒業生からご意見を伺おうということで、バラエティーに富んだパネリストの構成とさせていただきました。

これから行いますパネルディスカッションでは、次の2点について語っていただきます。

まず一つは、武庫川女子大学での各人の多様な学びの経験を振り返っていただき、思い出に残っていること、今でも役立っていること、あるいはさらにはこういった援助が欲しかったといったことについて、それぞれの経験から率直に語っていただきます。

もう一つは、女子大学であることに焦点を当てます。女子大学だからこそその学びとはどのようなものか、その長所、短所についても意見をいただきたいと思っております。先ほどの高橋先生のご講演の内容にも照らして、幅広く会場の皆さんも含めて議論ができればと考え

ております。

このパネルディスカッションが、これからの女子大学あるいは武庫川女子大学において、学生の学びをさらに充実・向上させるための手がかりになれば幸いです。

パネリストに加えまして、現役の学生さんにも2名来てもらっておりますので、また後で、ご意見を聞きます。そして、高橋先生には、ご講演に引き続き、コメンテーターとしてご意見をちょうだいしまして、女子大学での学びについて幅広い観点からの議論を深めていきたいと考えております。どうぞよろしく願いいたします。

それでは、パネリストの方のご発言に移ります。

学生時代の学びを振り返って

〔安東由則〕 皆様には、出身学科と現在の職業、そのやりがいについて、自己紹介をかねて語っていただいた上で、学生時代の学びを振り返って、思い出に残っている学びがあれば、それについて語っていただきたいと思います。時間がなくて申しわけないのですが、だいたい1人5分くらいをめどにお願いします。

それでは、手前の本仲さんからよろしく願いいたします。

〔本仲純子〕 本仲純子と申します。本日は、このような席にお招きいただいて大変光栄に思っております。

私は、薬学部の薬学科を卒業しております。昭和42年3月の卒業でして、薬学部の2期生です。薬学部ができて2年目に入学しましたので、上級生は1学年だけでした。

それで現在の職業なのですが、ちょっと皆さんにはわかりにくいと思います。私の職業紹介としては、徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部と書いてあります。これは、大学の大学院への改組によりまして、こういう名前がついておりますけれども、徳島大学の工学部、化学応用工学科というところで、分析化学と環境化学を教えております。私自身の研究は、センサー関係、それと環境の研究をしております。



大学時代の思い出をということなのですが、何しろ私は2期生ですので卒業生がおりませんでした。大学側としましては、薬学部を出るということは、まず薬剤師にさせるというのが大目標でございました。卒業生がまだ出ていませんから、先生方は非常に神経質になっておられたわけです。多分、大学のトップの方からは、100%合格させろということ

だったと思います。とにかく非常にタイトな授業と実験がございました。月曜日から土曜日の5時まで、ずっと午前中は講義、そして午後が実験になっていて、びっしりと、全く休む暇なく授業と実験が入っておりました。この大学に入ったとき思ったのですが、薬学部は高校よりも厳しいところで、もう1回選べるとしたら、薬学部はやめようと思うくらい詰め込まれました。

後で私は、大学院を徳島大学の薬学部（研究科）に入ったのですが、そこでの授業の内容に比べますと、本学の方がもう2倍くらいきっちり詰まっているという感じでした。単位も、149単位取っておりますから、恐らく今に比べますとよっぽどハードな授業で、先生方も大変であったらと思います。

何よりもよかったと思うのは、先生方の力も入っていたと思うのですが、非常におもしろい授業だとか、心惹かれる授業とか、感動する授業がところどころにありました。もうそれで来るのが楽しみでしようがないといった状況でした。

例えば、京都大学とか大阪大学が近いからでしょうか、そこを定年された先生を呼んできたという場合もあるんです。そういう先生方がされる授業というのは、歴史的な背景を含めて授業をしてくれますし、人間性が感じられて、非常に興味をそそられました。それから生薬の授業では、野外へ連れて行ってきて、外で直接、生薬、薬用植物の授業を受けたのが、懐かしい思い出として残っております。

今、私はいろんな学会に所属しておりますけれども、この11月に、私どもの方で日本ポーラログラフ学会の討論会を引き受けております。日本ポーラログラフ学会というのは、ハイロフスキーという方と、志方益三という京都大学農学部の先生が、ポーラログラフというものをチェコで創案されまして、その志方益三先生のお弟子さんの館勇先生が、日本ポーラログラフ学会をつくられました。その学会の討論会を私が開催するわけです。

その館勇先生から、私は学部のときに授業を受けております。それを知ったときは非常に衝撃的でして、本当にそのときに存じ上げていたら、直接行っていろんなお話を聞いたのにと、とても残念でしたが、何も知らないで授業を受けておりました。それから、音楽などの授業でも、非常に有名なオペラの先生が、授業中に歌ってくださるんですね。そういうぜいたくな授業をこの武庫川女子大学で受けることができ、とても感謝しております。

それで、私自身のことなんですが、私自身は、本学の薬学部にはすんなりと入学してきました。うちが薬屋でしたので、父親の白衣姿を見て非常にあこがれていて、私も白衣を着ようというのが何よりの目的でした。それから薬用植物だとか、薬のおいが大好きなんです。小さなときからクレゾールのにおいとか、天秤の上に薬包紙を置いて、そこにメリケン粉みたいな、小麦粉みたいなのを乗せて測っては喜んでおりましたので、薬学部に入るのは非常によかったんです。

ところが、すんなり入ってきたのですけれど、入った瞬間に、じゃあ私は何になるのかと考えました。高橋先生のお話を聞いたときに思ったのですが、薬剤師になると薬局に勤めるか、病院の薬剤師になるか、会社に行きますよね。うちは薬屋ですので、ずっと小さな時から見ておまして、これちょっと私にはできないなと感じました。病院の薬剤師というのもありまして、いろいろ考えましたですね。

高校のときにキュリー夫人の本を読みまして非常に感動しておりましたので、どうしても私は研究者になりたいと思いました。一番どこがいいだろうといろいろ考えましたが、やっぱり大学に勤めたいなと思いました。それが18歳で大学に入ったときでございます。それからは、もう何になれるとかなれないとか、そんなことは関係なく、是非とも研究者になりたいという希望がございまして、それに向かって進んだということです。

大学というところに勤めまして、とても生きがいを感じております。どうしてかと言いますと、学生さんを相手にして、その学生さんたちを育てるという強い実感があるからです。特に女子大生たちに一生懸命、私の考え方とかを話すのですけれども、そういう教育に関してとてもおもしろいと思っています。それと大学での研究は、自分の好みでできますので、割合と自由に研究テーマが選べるということも、たいへんおもしろいと思っております。

そういう意味で私はよかったと思っておりますが、このように何になろうか、どうしようかと考えるようになったのは、やはりこの大学に入ったからでございます。それと、自宅から出て寮に住んでおりましたので、いろんなことが外から見えるようになったという利点もございました。

私は来年の3月で退官になりますが、大学には41年勤めております。先ほど高橋先生が言われましたけれども、大学にいる間は、自分が女性であるということは全く感じておりませんでした。もう自由に、伸び伸びと、頭の中は夢いっぱいございました。しかし、勤めたもうその瞬間から自分が女性であるということを実感されました。結婚、それから出産といった、いろいろなことをどういうふうにやっていくのかということ、ずっと考え続けた41年ございました。ただ、私としては思うようにやってきましたので、全く後悔はありませんし、この武庫川女子大学が私の現在の原点であったと思っております。

〔安東由則〕 ありがとうございます。続きまして木村さん、お願いいたします。

〔木村泰子〕 大空小学校で校長をしております木村泰子です。よろしく申し上げます。大空小学校という名前を聞かれて、皆さん、変わった名前やな、と思われるでしょうが、とてもすてきな名前でしょう。これは大阪市に298番目に新しく開校して4年目のピ

カピカの小学校なんです。子どもたちがこの名前をつけ、大空のように広い心をもった人になりたいという願いを込めて、大空小学校という名前をつけました。

開校当時から4年間、もちろん教職員と保護者の方たち（今日もお顔が見えるのでびっくりしているんですが、はがきで申し込まれたのかと思います）、地域の方たちと、チームで子どもたちを育てようがんばってきました。そして10年後の社会はどんな社会になっているのか。そのときに必要な力を今、子どもたちにといいことで、新しいタイプの学校を目指して、とても楽しい毎日を過ごしています。



私は、40年前、短大の体育科を卒業しました。そのころの体育科というのは、今もそうかもしれませんが、まさに想像を絶する、一言で言えば地獄のような毎日でした。もうその当時の先生はいらっしゃらないと思うので、大丈夫かなと思いつつしゃべっておりますが、本当にいつ自分の命がなくなるか、オーバーな話じゃなくて、本当に腕の1本や2本が飛んでいったって、おかしくないというような日々でした。

もちろん授業は充実していました。とてもレベルが高かったのです。体育科というのは、実技が中心になりますので、特にその中でも、当時（今でもそうですが）、体操部というのは花形だったんですね。体操部のセンスというのは、たとえば、ダツと走って行って、ピョーンと上に飛んで、ひっくり返って、パツと着地するということです。それができないと単位をもらえない。もらえないイコール退学ということですから、それくらい厳しい条件の中でしたから、必然的に先生を恨みますので、仲間にはものすごい結束力が生まれます。これも一つのマネジメントです。今、それをぞんぶんに使わせていただいております。

だから短大の2年間というのは、授業とクラブだけで、それ以外は、「ひまわり」というおうどん屋さんがあって、そこにおいしいすめのでんぷらの入ったおうどんがある。そのおうどんを食べに行くことだけが楽しみでした。

小学校というと、きっとモンスター・ペアレントとか悪い話ばかりを学校現場に想像されると思うのですが、とんでもない。本当に夢を持って、大人も子どもも、一つの目標に向かってみんなで学び合っていて、こんな楽しい毎日はないと思っています。そんな毎日を過ごせるようになった原動力は、まさにいじめ抜かれた2年間にあります。

そういう意味では、武庫川の体育科を卒業した体育人としての自分を常に誇りに思っていますし、どんな大学で学んでこられた方よりも、自分は全く劣っていないなということです。少なくとも、体育の学習に関しては、今でも私の大きな誇りです。

校長になって、退職を間際にした今でも、毎年、体育の授業をしています。体育の授業ができなくなったら私は教師をやめよう。これが卒業したときの自分の誓いです。小学校に勤めていますが、今年は6年生と1年生の体育の授業を週1時間しています。体育の授業をすることで、すべてのストレスが飛んでいきます。

もう一つの思い出はクラブです。クラブは弱小クラブの水泳部だったのですが、私たちがいた2年間で、関西リーグで優勝することができました。水泳部が強くなった一番のスタートは、私たちの2年間だったんです。それは、それは、すばらしい先輩がおられました。その先輩は、体操の先生よりも恐ろしい先輩だったのです。もう本当に今でも苦しいことがあれば、そのときの出来事を思い出します。それよりも苦しいことはないというのが現在の心境です。その当時はプールなんてありませんでした。小さな声で言いますが、私たちは体育館を「ぼろ校舎」と言っておりました。陸橋の向こうには立派な、すばらしい建物があったのですが、こっちの体育館は本当にぼろぼろの体育館でした。私たちが一番誇りにしていたその体育館なんですが、そこにはプールはありませんでした。だから附属高校の50メートルプールへずっと練習に行きました。合宿になると、朝から夜まで泳いで、2キロや3キロはざらな練習量でした。

私は背泳ぎが専門なのですね。みんなが練習を終えて食事に上がったときに、私は小杉という旧姓なのですが、1人の先輩が、「小杉、残り」と一言いいました。そこから50メートルを恐らく20回くらい(1000m)泳がされました。先輩はプールの上をクマのように歩かれるだけなんですね。50メートルプールで、私は足が立たないんです。途中でしんどくなくても立てないんです。だから、溺れるか泳ぐか、二つに一つを選択しかない。夜遅くなってきて、ものすごい雨が降ったんですね。背泳ぎですから上を向いているでしょう、そしたら雷がピカピカピカと走るんです。「当たって、当たって」と、もう雷に当たってというくらいの練習だったんです。その20往復の練習が終わった直後、私はその先輩を心の中ではとっっても恨んでいました。

何でこんな苦しいことを自分はしているのだらうと思いながら、やり終えた後に、50メートルプールの端と端を考えました。練習をスタートしたのはこちらの端、そこにビーチサンダルを置いていました。練習が終わったのはあちらの端だったんですね。練習が終わった後、その先輩が何も言わず、雨の中、そのビーチサンダルを私のところへ持ってきてくれました。私は水着で濡れています。先輩は水着を着ていないので、ほとほとに体中が濡れています。その姿を見たときに、人を教えるってこんなことかなと、ずっとその先輩に与えていただいたその力を、今現在も自分の中でみんなに与えたいなと思って仕事をしています。以上です。

〔安東由則〕 ありがとうございます。続きまして、稲村さん、お願いします。

〔稲村和子〕 奈良県文化観光局文化課の稲村でございます。よろしくお願ひいたします。

私は、昭和52年に家政学部の被服学科を卒業いたしました。現在の仕事の内容とそのやりがいにつきまして、お話ししたいと思います。

現在、県の文化行政の総合企画及び調整に関する事、それから文化芸術の振興にかかわることというような、かた苦しい、漢字で書くとややこしい仕事をしております。俗に言う箱物行政、県立文化施設の運営とか管理とか、そういったことをしております。それからもう一方で、奈良県に世界遺産が三つあるのですけれども、それに加えて飛鳥・藤原京の世界遺産登録を目指して、登録とか保全活用に関する仕事をしております。



私はこれまで農林部の生活改良普及員を皮切りに、農村の現場を回ったり、農業試験場で調査研究をやったり、児童福祉の方でDV対策や子ども対策をやったり、若年者の雇用ということで雇用対策をいたしました。それから文化施設である万葉文化館という県の施設で現場の仕事も行いました。そのようなことを踏まえて、今、文化課で課長という立場にあります。自分が行動することで、そしていろいろな行政施策を考えて打っていくことで、少しずつではありますが、住民の方にとって暮らしやすい環境が提供できているのかなと思っています。部分的ではありますが、県の政策決定の一端を担って、行政の方向づけができていているように思います。

私の周りには、立派な大学を出た男性の方が、たくさんおられます。しかしながら、そういう方々は仕事人間で、生活者としての経験がないわけです。それから、子どもを育てることも奥さん任せにしています。それに比べて私には生活者としての経験がありますので、その切り口から提言をさせてもらえるということは、非常にすばらしいことだと、今、考えているところです。

振り返りながら、大学時代の思い出についてお話しさせていただきます。私はいいかげんな学生でしたが、4年生の1年間につきましては、一生懸命、卒業論文に取り組みさせていただきました。繊維科学研究室の、今は亡くなられました安田先生、それから今日も来ていただいているのですけれども、奥野先生にご指導をいただきまして、6人のグループで卒業論文に取り組みしました。

1年間、研究室に入って、毎日毎日みっちりと染色実験をするわけです。長いときは24時間の徹夜実験をしたこともございます。学校で寝泊まりしたこともありますが、友人の下宿でお互いに眠らないようにつきあいながら、「起きよ、起きよ」と言いながら卒論

をまとめたことも、よい思い出でございます。

今考えますと、そういう実験というのは、本当に稚拙なもので、先生の手伝い的な研究でございました。しかしそれを通して、一つの真実を得るために、多くの労力と時間が必要だということがわかりました。緻密な実験研究の手法と技術が身についたと思います。

その中で、1日の終わりにお茶の時間がございまして、先生方とすごく親しくお話をさせていただきました。そういう中でお話を聞きながら、目上の方とお話の仕方とか、皆さんが考えておられることについて、いろいろ知ることができました。人間的には、卒業実験に取り組むことで忍耐力と協調性が身についたように思います。それから、先生方との深いつながりによりまして、親しき仲にも礼儀ありといったような、目上の方との付き合い方を学んだように思います。

今、大学時代を振り返りまして、深くはないけれども、基本的な学問の知識や技術を広範囲に学べたという利点がございます。今、申し上げましたように、職場ではいろんな部署に配属されますが、入り口で戸惑うことはありません。それから、武庫川女子大というのは、かなりクオリティーの高い女子大でございまして、そういう中にいさせてもらいましたので、万葉文化館には画家の先生方とか、それから国文学の一流の先生方がたくさんいらっしゃいますが、そういう方々との対応につきましても、堂々と応対ができるというのが利点だと思います。

それから、実験で培われたプラン・ドゥ・シー（Plan-Do-See）ですね。これは卒業してから実感したことで、課題解決の方法とか問題解決とか、それから目標値の設定とか、そういったものはどこの分野に行っても必要なことでございます。行政の政策決定にも、これがないと提案が通りません。そういうことを勉強させていただいたというのは、たいへんな強みだなと思います。

一つ心残りなことがあります。今では長年の職業経験から、集中して勉強すると割と早く頭に入ります。でも、どうして、せっかくあれだけ勉強の時間があつたあの4年間にきっちり勉強しておかなかったのかと、それが非常に残念です。

さらに言うと、もっと真剣に英会話を勉強しておけばよかったと思います。今、文化観光局におりますので、世界遺産の関係で、今年も6月にスペインの世界遺産会議に行つてまいりました。ところが、英会話ができる方は直接会議内容を聞き、理解することができそうですが、私は通訳を間に置いて、何となくムードで聞いているだけでした。いつも勉強しようと思ひながら、その場に臨んでしまうというところがございまして。そういった国際会議も多くございまして、来年は奈良県も平城遷都1300年ということで、もっと国際会議も増えてまいります。それまでに何とか英語を勉強しようと思ひます。

ありがとうございました。

〔安東由則〕 ありがとうございます。続きまして、佐守さん、お願いします。

〔佐守香里〕 これだけ素晴らしい方々がおられる中に、なぜ、今、私がいるのかと、ちょっと悩んでいます。

私は平成10年に、音楽学部の声楽専攻科を修了した佐守香里と申します。現在は、オペラ団体である関西二期会に所属し、演奏会などにも出演させていただいています。また、レイドバックミュージックスクールという音楽教室で、毎日、声楽・ヴォーカル・ボイストレーニングを、5歳から78歳くらいまでの幅広い年齢の方に教えています。ジャンルも演歌、シャンソン、クラシックなど幅広く、時にはしゃべり方まで習いに来る方に、レッスンをさせていただいています。

今まで自分自身が学んできたことを土台にして、こういう仕事ができていることをとてもうれしく思っています。また、それを自分なりにアレンジしてレッスンをしているのですけれども、全然歌えない、声が出しにくいと言って来られた方が、1年くらい経ったときにすごく歌えるようになって、とてもうれしいと言ってくださることがあります。私が何かを伝えて、そのことによってもものすごく喜んで幸せになってくださり、それを毎日見られること、しかも30分ごとに人が替わって、みんな幸せになってくれることがすごくうれしくて、この仕事は天職だと思って頑張っています。



大学時代の思い出としては、たくさんの方がいますが、まずは恩師、師匠との出会いです。音楽ですのでマンツーマンで教えてくださる師匠ができました。そのときに出会った先生が本当に素晴らしい方でした。はっきり言って、私は本当に全くできなかったのですが、そのできなかった私を見捨てることなく指導してくださいました。私は今もドキドキしていて、マイクを胸に当てたら、バクバクという音が皆さんに聞こえるのではないかなと思うくらいなんです。すごい上がり症で、歌っても、歌っても緊張して全然だめだった私を、ため息と涙を流しながら「どうしてかね、どうしてかね」と考えて、「じゃあ、あなたやったらこうしてみたら」「ああしてみたら」と言ってくださったのです。今もその先生に習っているのですが、「あなたみたいに手のかかった生徒はいなかった。本当に苦労させられたから、今は結構らくよ。いろんな生徒がいるけど、何でも対応できるわ」と言ってくださいます。そういう先生と出会えて、そのおかげで憧れだったオペラであるとか、演奏会とかにも出させていただけるようになりました。一生懸命指導してもらえる先生に出会えたのが、一番の大きな思い出です。

今の音楽教室で教えるということは、私の大好きな仕事です。私がすごく真剣に教えられるのは、この師匠が私に対してすごく真剣に教えてくださったからであり、真に教えるということ、レッスンを通して、自然に教えていただけたからだと思っています。

私は、この大学の特徴でもある学友会という組織で、総務委員長をさせていただきました。そのことによって、普通の一般学生であつたら全く経験できないような有意義な経験をたくさんさせていただきました。

まず、総務委員というのが、各学科から1名ずつ選出されます。立候補される方もいますが、私は当たらないように欠席したら当たってしまいました。初めはちょっとふてくされていましたが、毎日ミーティングがあつたので、その決められた日から毎日行きました。ものすごくやる気のある人たちがいっぱいおられるので、「ああ、私、この中で1年間もまれるのかな」と、とても不安になりました。また前年度の総務委員会の先輩方が、怖い感じでいらんではるんですね。その中で、自分の意見を的確に伝える、そして、人の意見に対して的確な答えをする。これほど苦手なことはないというような日々を毎日繰り返しているうちに、何を血迷ったのか委員長になりたいと思ってしまうました。本当はここそと欠席もできそうな部署を探して入ろうと思つていたのですけれども、やるならやっぱり委員長をやろうという気持ちでなってしまうました。それが一番苦しい思い出です。

それからいろんな経験をしました。12月に委員長に決まって、1月に阪神大震災が起きました。そのとき、普段の大学では経験できないような、そしてもちろん総務委員長をやつていても経験できないような経験をしました。震災後すぐに大学の方からも要請があつて、ボランティアを何とかして立ち上げました。すぐに要請されたところにボランティアを送つてほしいということで、自分の家も何かめっちゃくちゃになっているのですが、なぜかボランティアの張り紙を学校に張りに来ました。そして申込みの電話を受けて、全体を統括してボランティアを派遣して、自分も参加しました。役所の方たちといろんなコミュニケーションをとることによって、何か大人の社会の裏側みたいなものも見てしまいました。でもすごく真剣にやつたおかげで、今でもその役所の方たちと交流があります。

また、それのご褒美みたいなことがたまたま回ってきました。日本の学生代表が台湾へ行くというイベントがあつて、それに参加させていただきました。全国のいろんな大学の学生組織の中で委員長をされていたり、事務局長とかで頑張つていらっしゃる方々、32、3名の集まりに入れていただいて、台湾まで行きました。途中でまた、場違いな雰囲気だなどということには気づいたのです。みんな経済とか政治とかをすごく勉強していらっしゃる方ばかりでしたので。私なんか音楽を中途半端にやっているだけでしたのに、台湾の政治家との意見交換の場に出ってしまったのです。何もわからないままに参加することによつ

て、世の中の同じ世代の人々でも、学ぶことが違うとこんなに違うのかとしみじみ思いました。

総務委員長として活動させていただいて、文化祭で挨拶をさせていただいたり、普段だったら関係することのできないような学長先生や諸先生方とも直接お話をする機会がありました。そういう中で緊張感も学べましたし、人の立場に立ってものごとを考えると、リーダーシップをどのようにとっていくかとも体験しました。また、さまざまな年代や、役職の方と交流させていただいたので、コミュニケーション能力が身についたと思います。目上の方にはどうやって話すと話を通じるのかというテクニックも身につけられて、今の仕事にも役立っていると思います。それが私の大学で学ばせてもらったことです。

身につけておけばよかったと思うのは語学ですね。私たちは声楽科なので、必須言語としてはイタリア語が入っているんですね。ただ、イタリア語もよくよく思い出してみると、前期10回、後期10回、1年間しか学んでなかったんです。当時はすごくしゃべれると思っていましたが、20回の授業で何がしゃべれるんだというのが実感です。しかも、英語が必須じゃなかったのに、ラッキーと思いました。その代わりにドイツ語とかフランス語とかも歌には必要なので、学科の授業と全学共通教育の授業でフランス語を受講して、ウキウキしていました。しかし、世の中でやっぱり必要なのは英語です。できれば学科でもっとちゃんと英語があればよかったと後悔しながら、今、必死で英語を勉強する気持ちになっているところです。

以上です。

〔安東由則〕 ありがとうございます。ちなみに、本学でも今は英語が必須になっていますので、付け加えておきます。

では、最後になります。伊覇さん、お願いします。

〔伊覇ゆかり〕 伊覇ゆかりと申します。

私は、平成18年度に短大人間関係学科を卒業し、大阪ガスのガス科学館に就職いたしました。幅広い年齢のお客様に館内をアテンドする仕事をしていましたが、2年間勤務した後、今までの経験を生かして、子どもとずっと接するお仕事が何かないかなと探しておりまして、今勤めているキッズニア甲子園へ転職をすることにいたしました。

キッズニアとは、ご存じの方もいらっしゃるかも



しれませんが、子どもたちのための体験型施設です。子どもたちに、働くということを実際に行ってもらい、仕事を学ぶことができる場所です。3歳から15歳までの方に働くおもしろさ、気づきや達成感を感じていただけるように、私たち従業員がレクチャーをしながらサポートしております。幅広い年齢のお子様と接するというだけに、対応の仕方も気配りの難しさも日々感じております。自分自身が向上できていることも毎日感じており、また勉強にもなっていますので、やりがいを常に感じながら仕事に務めております。

現在、私は、そのキッザニア甲子園の中にある、デパートパビリオンでパビリオンマネージャーをしております。社会人経験は浅いのですが、本日は大学時代の話も含めて皆様にお伝えさせていただきます。

私の在籍していた人間関係学科では、主に心理学と社会福祉学を学んでおりました。カウンセリングと対人関係の授業では、カウンセリングの方法について学ばせていただきました。カウンセラーとは、クライアントに答えを出してあげるのではなく、クライアント本人が答えを自ら導き出せるように、しっかりと話をしてあげることだということ、そして聞き方が大切だということ学ばせていただきました。

これは、カウンセリングにとどまらず、人と人が会話をするときにも言えることなので、例えばお客様からご意見をいただくときも、そういった人と人との話なので、言いたいことがあっても、まず相手の話を最後まで聞くということを実践しております。そうすることによって会話も解決策もスムーズに進行し、とても対話がスムーズに行えております。

また、私は、社会福祉に興味があってこの学科を選んだのですが、その中でもレクリエーションの授業や余暇活動の支援実習が、とても楽しかったことを覚えております。講義だけではなかなかわかりづらい、想像しづらいこともあったのですが、実際に体を動かしながら、体験することで、余暇活動やレクリエーションがなぜ必要なのか、その本当の意味を知ることができました。実践することによって、私がレクリエーションのインストラクターだったら、あるいは余暇生活指導員だったら、対象者が何を求めている私は何をすべきなのかと、さまざまな視野から深く考えることができるようになりました。このように、相手の立場に立って物事を考えるという力は、大学時代に養えたと思っております。

最後に、私の大学生活で一番思い出に残っていることは、体育祭のコスチュームに参加させていただいたことです。私は、クラス幹事をやっていたため、参加メンバーも自分で集めないといけなかったのですが、私も含めてダンスの経験者が多かったこともあって、たくさんの学生が参加してくれて、毎日ダンスの練習をしておりました。私は、大学時代にクラブ活動をしていなかったのも、まさかこんなすばらしい経験ができるとは思っておりませんでした。メンバー全員でつくり上げたコスチュームによって、最後の学生生活を

謳歌することができました。また、一つの目標に向かってみんなで取り組むことで仲間との絆も深まりました。

今でも大学時代の多くの方とつながりがあり、それが大切な友人です。すてきな友人に出会えただけでも、この大学で学べたことは本当によかったと強く感じております。勉強だけではなく、体育祭や文化祭など、学生が力を注いで取り組む行事があったことで、一つのことをみんなで協力し合うという、一緒になし遂げる力をこの学校で身につけることができたことに、非常に感謝をしております。

私は、短期大学だったので、大学に在籍していた期間は2年ととても短かったのですが、多くのことを学び、また、たくさんの思い出をつくることができたので、大変充実した学生生活を送ることができました。

以上です。

〔安東由則〕 ありがとうございます。

もっといろいろ裏話なども含めて語っていただけたら、もっとおもしろいのでしょうか、時間がなくて申し訳ありません。

現役学生による学びの振り返り

〔安東由則〕 これまで卒業生の方にお話いただきましたが、現役の、現在進行形の学びはどうか、その声を聞いてみようということで、二人の現役の学生さんに来てもらいました。その二人に武庫川女子大学での学びについて語っていただこうと思います。

まずは、生活環境学部情報メディア学科の新井さん、お願いいたします。

〔新井菜月〕 生活環境学部情報メディア学科に所属しております、3年の新井菜月と申します。よろしく申し上げます。

私がこの大学で学びまして、最もよかったなと思うことですが、それは先ほど佐守さんにお話しされました学友会活動で、私も佐守さんと一緒に、総務委員会の委員長をさせていただいております。私の場合は、もともと私の前の先輩がいろんな事情がありまして、途中で総務委員会を、続けることができなくなりました。いきなり前の委員長から電話があって来てくれということになり、びくびくしながら行って、引き受けることになりました。その際に、私の場合はリーダーシップをとることが中学・高校の時代から何度かありまして、それがいい経験であったことと、先輩の方から就職活動にも役立つからやってみなさいと言われて、やらせていただくことになりました。

引き継ぎをしながら、私は前の委員長の先輩に「あんたやったらできるから頑張ってみ

て」という説得をしていただきまして、委員長になりました。各学科の幹事長さんがすごくリーダーシップをとることができる学生ばかりですので、会議でたくさん話し合っ、ぶつかり合う中でそれをまとめなきゃいけないということで、すごく悩みました。

その際に、同じ学科でバイト先も同じ先輩に私が、「顧問の先生に相談しようと思うんです」という話をしたら、「何を相談するの」と言われました。そして「自分の考えは持っているの」と言われたんです。私は何も自分の考えを持っていなくて、ただこういう現状の中で、どうしたらいいですかということだけを相談しようと思っていました。そのことを伝えたら「そんなこと、今は通用するかもしれないけど、社会に出たら通用しないよ」と言われました。「あと何年間かで社会に出て、自分の悩みとかを、相談する機会があるかもしれないけども、それをする際に自分の意見を持ってないと捨てられてしまうよ」と言われました。その際に、「ああ、私今は学生なのですが、今やっている経験というのは社会に出る一歩手前のすごい経験をしているんだな」ということに、その先輩の一言で気づきました。

それからは、自分がもし不安になってしまっ、て相談したい場合があったなら、自分の意見と、自分の意思を持って、それを顧問の先生に相談して、その際にいろいろ意見をいただいで、そしてみんなに報告して一緒に考えていくようにしています。

そういう経験ができるのは総務委員会に所属できたからだと思っております。勉強とかでは、そこまではできませんので、すごく残っている思い出はないのですが、学友会活動を通して、学科に所属して普通の勉強をしているだけではできないことをたくさん学べたので、それが今一番よかったなと思っ、ていることです。

ありがとうございます。

〔安東由則〕 卒業したら感じ方が変わるかもわかりませんが、現在進行形の学びについて語っていただきました。ありがとうございます。

もう1人、文学部の健康・スポーツ科学科の4年生、後藤さん、お願いいたします。

〔後藤早紀〕 文学部健康・スポーツ科学科4年の後藤早紀と申します。よろしくお願ひします。

私は、最初は短期大学部の健康・スポーツ学科に所属しておりました。編入学を経て今は四年制に所属しております。

学科の勉強のことも紹介したいのですが、今日、私が紹介させていただきたいのは、先ほど伊覇さんがおっしゃっていた体育祭のことです。私は応援団に所属していました。1年生のときに人数が足りないということで、本番1週間前にいきなり呼ばれて、人数合わせの形で入団いたしました。既に入団している学生には「すごく歓迎されるよ」と言われ

ていたので、ウキウキして入りました。しかし、本番の1週間前だったので、もう死にも狂いというか、すごい状態になっており、歓迎どころか、早く覚えることだけに追まわされて、すごくしんどい思いをしました。たった1週間なのですが、先輩の指導が本当に厳しくて、練習帰りに自転車で駅から家に帰るとき、車が飛んでこないかなとか、看板が落ちてこないかなと考えるくらいつらいこともたくさんありました。

そんなつらさを経験したにもかかわらず、結果としては3位ということになってしまって、すごく悔しい思いをしました。もうやめてやると思っていたのですが、次の年の副団長に選ばれてしまい、やらないといけない状況になってしまいました。でも与えられたからにはこの悔しさをぶつけてやろうと思い、1年間かけて応援団優勝という目標に向けて準備をしました。

体育祭といっても、有志の集まる応援団なので、人数が集まらないことには始まりません。短期大学の健康・スポーツ学科というのは、常に1、2位を争うハイレベルな学科なんですね。しかし最初、本当に人数が集まらなくて、このままじゃダメじゃないかなと思い、みんなのいないところで泣いたこともありました。それでも、授業の終わりに1年生のクラスに顔出しに行き、「入って、入って」と頼んで、何とか人数を集めることができました。

1年生のときの悔しさを2年生全員が持っているもので、みんなで話し合いを何回も何回も重ねて、いろいろな壁を突破しながら、乗り越えながら、1年生が入団してからの2カ月間くらい本当に頑張っていました。その結果、優勝することができました。私はそのとき、総務委員会にも所属しており、学科の代表もしておりましたので、コスチュームの方にも少し顔を出しながらやってきました。コスチュームも、前年度が2位という結果で、応援団と同じように悔しい結果に終わっていたので、コスチュームと応援団の両方とも優勝という目標が達成できたことを本当に嬉しく思っています。

武庫川女子大学で本当によかったなと思うことは、応援団に参加できたこともそうですし、短期大学のときには、学科の幹事長と総務委員会をさせていただいたこと、そして、今はオープンキャンパスの学生スタッフとして、司会やトークライブをさせてもらっていることです。もう一つ、「Muko ナビルーム」というものが今年から始まったのですが、その中で、休日に受験生や保護者の方が武庫女の見学に来られた時、その案内などを行っております。

いろいろなところに首を突っ込んでいたら、すぐ声をかけていただいて、こんなにいろいろな経験ができるなどとは、本当に入学する前には思ってもいませんでした。今、4回生で就職先も決まっているのですが、その就職先に出会えたのは、こういう活動をしていたからだと思い、本当に武庫川女子大学に入学できてよかったなと思っております。

以上です。ありがとうございました。

〔安東由則〕 今も昔も地獄はあるみたいですね。皆さんにいろいろ語ってもらいました。聞かせていただいて私は少しホッと胸をなでているのですが、それはやはり授業とかゼミということで、学問や授業からいろいろ学ぶことがあったことを卒業生のどなたからも言っていただけたことです。当然といえば当然なのですが、やはりそこが皆さんの一番の基本になっていると思います。いろんな意味で奥深さやおもしろさ、あるいは何をやるにしてもその経験がその基礎になっているというお答えをいただいたと思います。

もう一つは、クラブやゼミ、それから学友会などにおける、同期生や先輩－後輩といった人間関係における支え合いや厳しさを通しての切磋琢磨であるとか、リーダーシップということが出てきたかと思います。

それから、三つ目は応援団やコスチュームという、学生が主体となってやっているもの、特に伝統行事というものの意義を感じました。そうした行事においては今も昔も非常につらい経験もされたようです。私もクラス担任をやっていて、いろいろ1年生からの愚痴を聞かされました。とてもつらいこともあるようです。しかし、そうした学生たちも3年生、4年生になれば自慢そうにその経験を語っていますし、あるいは卒業してもその経験をいきいきと語ってくれます。このような学生や卒業生の言葉を聞きますと、伝統の尊さと申しますか、大切さをひしひしと感じる次第です。

高橋先生、本学の卒業生・在学生の学びの経験をお聞きになったわけですが、外側から見られてどのように感じられたでしょうか。武庫川の裏側も見えたかと思いますが、ご感想があればお願いします。

〔高橋裕子〕 やはりいろいろな場面で先輩方とともに、あるいは同級生とともに、リーダーシップのスキルをよく磨かれていることを強く感じました。その厳しさの中から、例えば、水泳部の先輩のサンダルの話などもすごく心に残りましたし、そういう横のつながりや縦のつながりを築かれながら、実社会で生きていく力を培われているという印象を受けました。

私たちの大学でも、「私たちの宝は卒業生なのです」と、よく津田塾大学の学長は述べています。まさに武庫川女子大学におかれましても、卒業生は本当にこの大学の宝で、どのようにしてこの厳しい実社会を生き抜いてこられたかということを、次の世代に伝えていく、そういう機会を大学や同窓会が積極的に、作っていかれなくてはならないと思いました。それが次世代の女性たちの道を拓く上で、大きな役割を果たしてくれるのではないかと思います。



〔安東由則〕 ありがとうございます。

先輩のご経験を聞いて、それを後輩に伝えてもらうという機会をもっと設けていくべきだとも感じました。時間の関係もありますので、先に進ませていただきます。

女子大学であるからこそ、武庫川女子大学であるからこそその学び

〔安東由則〕 次に、二つ目の課題に移ります。女子大学ということに焦点を当てまして、その学びを振り返っていただきます。女子大学であるからこそ、あるいは武庫川女子大学であるからこそできた学びとは何かを検討していきたいと思います。パネリストの皆さんには、この観点からの学びを振り返っていただきまして、その長所、短所も含めてお話をいただきます。

女子大と武庫川女子大の二つに分けてそれぞれの長所・短所を述べるのはなかなか難しいかとは思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

今度は向こうの側の伊覇さんからお願いできますか。時間の関係上、お一人3分と短いのですが、よろしくお願いいたします。

〔伊覇ゆかり〕 女子大学でよかったと思うことは、女性同士ということもあって、すぐに友人関係を築き上げることができたという点です。それと、同性ということで安心感がありました。そういったこともあり、入学してすぐに学校にもなじめましたし、この安心感があったからこそ不安も不満もなく、楽しい学生生活を送ることができました。

女性同士ということで、感性や能力を互いに高め合うということもできました。例えば、全く私は興味がなかったんですけども、諸検定やTOEICの資格を取ろうという友人がいたとしたら、そういった友人が近くにいると、今まで何も興味がなかった私もそれを取得したいという気持ちになり、ともに情報交換をしたり学んだりしたことを覚えております。

また、就職活動を意識し始めたころから、友達同士でも言葉遣いやマナーというものをお互いに気にかけるようになりました。そういった環境づくりという点で、自然とできた友人が周りにいたということもとてもすばらしく、またそれによって、就職がスムーズにいったのではないかと、今になって思っております。

逆に、男子学生がいる共学と比べることはちょっと難しいとは思いますが、共学に入っていたらどうなのかなと考えます。社会に出ればほとんどの職場では男性がいますし、また、男性のいる中で私たちも働いていけないといけないので、男子学生がいる場所で学ぶということも、もしかしたらいい刺激になったのかもしれない。しかし、少なくとも私は、就職をした上で、女子大を卒業したということに何も支障はありませんでし

た。

本校を卒業してから、女子大学は女性が社会に出るための準備期間であることと、そして、大人の女性として成長することができるということを、卒業してから気づくことができました。

武庫川女子大学の特長とよさですけれども、それはたくさんあるのですが、まず大学では珍しいクラス制、担任制をとっているということですね。担任なので先生と学生の距離が近くて、困ったことがあってもすぐに先生に相談しに行くことができました。また、担任の先生以外でも、授業が終わった後に質問をしに行っても、すごく丁寧に教えてくださる先生がいらっしゃいました。中にはメールで質問をすると、私が簡単に1文書いただけなのに、すごく丁寧に、そのことに対してすごく長いメールを返してくれて、そういった優しい先生もいらっしゃったことをすごく覚えております。

本学での学びについてですけれども、本当に学ぶ環境は整っていました。例えば、多種多様な本がそろっている図書館もありますし、パソコンの設置台数も十分でした。本学では、学生自身が学ぼうという意識さえあれば、幾らでも学べる、素晴らしい大学だと思っております。

以上です。

〔安東由則〕 ありがとうございます。では、続きまして佐守さん、お願いします。

〔佐守香里〕 今回の質問で、女子大の長所とか短所とか聞かれたときに、私は中学2年のときから武庫川の附属中学校に通って、そのまま高等学校に行き、大学に行きということだったので、女子大であること自体に気づいていないくらい自然に大学時代を過ごしてしまいました。それで、長所と言われて改めてどうだったのかなと考え直したときに、私にとって長所と感ずるところは、やはり同性ばかりいたということで、それで学業に専念できたのではないかと、同じように、自分自身を自由に伸ばしていくことができたんじゃないかと、思っています。私の性格に関しても、総務の仕事にしても、恥ずかしいとかそういうこともなく、格好つけることもなく自由に成長できたのではないかなと思いました。

短所として感ずるのは、やはり女性ばかりということで、少しだけ世間を狭く見るという癖がついたんじゃないかなと思えます。本来共存して生きていくべき男性の欠けた場所ですとすると、もしかしたら卒業して社会に出たときに、先ほども言うておられましたけれども、職場のほとんどに男性がおりますので、その中でうまく自分を出したり、コミュニケーションをとったりというのに、ちょっと時間がかかったかなということは思いました。

武庫川女子大学のよさということでは、私は音楽学部ですから本当に少人数で、1学

年、40から50人でしたので、すべての学生に目が向けられ、落ちこぼれることなくいろんな授業を受けることができました。ほかの音楽大学ですと人数も多いので、上位者しか受けられない授業があったりするようです。私たちの場合はどんなところ（順位）にいても全員同じ授業を経験できて、同じように学んでいくことができた。これは本当にすばらしかったと思います。

また、男性学生がいない分、オペラの試演のときには、本当に手の届かないようなオペラ歌手の男性が来て、「うおー」と歌ってくださるという、すごくラッキーな経験ができたと思っています。

さらに、この学校が総合大学ですので、全学共通教育というのがあって、好きな授業を受けることができました。音楽のことだけじゃなく、興味のある分野、それがまったく異分野の薬学のものでも、ちょっと薬学科に行って受けてみたり、語学でも、社会的なことでも、何でも学習したりすることができたのは、やはりこの学校ゆえではないか、と思いました。

もう一つ、私は中高からいましたので、そのときからのしつけですね。中学校、高校では正門で一礼するんですね。入るときに「今日もよろしくお願ひいたします。いつもありがとうございます」と。初めは何でこんなふうになっているのかなと思っていました。そのうちに、感謝の気持ちも自然と出てくるようになって、店を出ていくときにもありがとうございましたと思うようになりました。そういうことがあったおかげで、仕事をしていく上で、愛社精神が早く生まれる。私はここに勤めるのだと思ったその日から、ありがたいという気持ちになれて、仕事にも自然と熱が入ったり、コミュニケーションもうまくとれていきます。また、新しい仕事が与えられ、それも真剣にやると、またさらに上の仕事が与えられるというふうに、すごくいい循環になります。これもやっぱり中高からのしつけのおかげかなと思って、武庫川女子大学でよかったなと思いました。

以上です。

〔安東由則〕 ありがとうございます。それでは、稲村さん、よろしくお願ひします。

〔稲村和子〕 私は、大学から武庫川に寄せていただきました。大学に来たときに、当時、女の子は25歳までに結婚するものといわれていましたので、父親から大学へ行ったら嫁入りが遅れる、それでも家政学部だったら、洋裁も和裁も教えてくれるから行ってもいいというような了解を得て、自分でも何か安直な考えで入学いたしました。それまで共学校におりましたから、年ごろの女の子にとって、女性ばかりで何かおもしろくない環境だと思い、楽しそうに男子学生と遊んでいる共学校がうらやましかったことも事実でございます。

それともう一つは、家政学部がそうだったのかもしれませんが、お嬢さんばかりで、きれいで上品なところだなと感じました。ここは何と無菌状態な大学なんだ、というようなイメージがございました。一般的に、こんなところに居たら、フランクに男の人とつき合えないのと違うかなとか、構えてしまうのと違うかなとか、それから男性を美化してしまうのと違うかなとも思ったこともあります。

一方、外に出ましたら男性社会でございます。特に、武庫川だけではないのですが、女子大生というのは、ものすごくまじめでよく仕事はするんです。係長級までの仕事はそれでいいのですが、その上になったら、人にうまく動いてもらうための力量が求められます。そういうところが割と欠けているのではないかと思います。男性についての知識とか免疫とかがなくて、幅広い視野に欠け、女性中心の考えに偏ってしまうという弊害はなきにしもあらずだと思います。

ただ、先ほども申しましたように、生活者の視点というか、次代を担う子どもを育てていく母性、そういう観点から社会現象を見る目を養う場だというのは、在学中からずっと教えられてきました。今の職場には、法律や経済、工学、農学など、経済性や合理性などの視点でものごとを見て解決していこうという方はたくさんおられます。それとは異なった切り口、例えば生活者といった視点でとらえて、提案・実践できる数少ない人材を育てる場が女子大だというように考えております。

特に、武庫川女子大につきましては、在学中にはそれほど思わなかったのですが、万葉文化館に勤務していたころに、OB会の奈良県支部の先輩方が訪問してくださいました。その方々の見学でのまじめで真摯な態度に、案内を頼んだ研究員や学芸員たちが感心しておりました。武庫川女子大といいますのは、派手さはありませんが、きちんとしたいい家庭、いい生き方のできる女性を育てる場かなと思いました。

在学中は、先程来、述べられておりますように、ちょっと窮屈でした。クラス制とか、私たちのときは上靴への履きかえがあったんですよ。入り口でごあいさつをするとか、しつけの効いたお行儀を教えてくれる、年ごろの女の子にとっては数少ない貴重な場がございました。

それから、今になって思うのですけれども、すごく上質なものに囲まれているんですよ。環境といい、友人といい、先生方といい、こういった恵まれた状況にありましたので、上質なものを見る目の基礎をつくってもらったと思います。ハイソなものにもおびえない、自分というものを考えます。そういった人々を育てる場として、女子大というのはやっぱり大事なところだと今考えている次第です。

ありがとうございました。

〔安東由則〕 ありがとうございました。次に木村さん、お願いします。

〔木村泰子〕 今お伺いして、同じ大学で学んできたのかなと思って聞いていました。

女子学生ばかりの学びの場、その最たる長所は、やはり一人ひとりにオール・ラウンドな学びと体験が与えられることだと思っております。これが最も大きな女子大学の魅力であり、これをいかにして長所に変えられるかが問題だと思います。

小学校でも、1年生と6年生では大きな違いがあります。1年生の子どもたちの集団、その中の男の子と女の子、中学に行く前の6年生たちの集団、その中の男の子と女の子は全然違いますよね。低学年の間は「これしようか」「これどうする」「だれかしたい人」と言ったら、皆がしたいから「したい、したい、したい」と、自分からその学びを獲得するための積極的な動きを、一人ひとりの子どもが本能的にとります。ところが6年生になると、「したい、でも失敗したら恥ずかしい」と思うようになる。恥ずかしいと感じる対象は、女の子の場合は男の子、男の子の場合は女の子です。その目に見えない空気が積極的な学びを妨げているのであり、それをいかに私たちが崩すかということで、日々奮闘しているのです。そういう意味では、暗黙のうちに、これは男子学生がやってくれるだろうとか、これは女子学生がやるだろうとかいうような空気が、支配的なのです。その意味では、そういう空気が一切ない女子大で人としての学びを確実に獲得できること、それが女子大学の大きな魅力だと思います。

反対に、短所というのは、長所イコール短所といえるかもしれません。大学の2年間、あるいは4年間、女子学生ばかりの中で学んでいる学生自身が、女性だからという視点に立っていると、自分自身もそうですが、きっと社会に出たときに生きていく力は弱くなっているだろうと思います。つまり、女性だからということではなくて、社会で生きていく1人の人間として学ぶのであれば、女子大学の短所を克服できると思います。

〔安東由則〕 ありがとうございます。それでは、最後に本仲さん、お願いします。

〔本仲純子〕 私は4年間だけ女子大学で過ごしました。高校まで共学でしたし、それから大学院は男性と女性が修士課程では半々でした。そして勤務した先はほとんどが男性で、女性がほとんどいないという状態でした。

女子大を出た後、すぐ工学部へ行っていたら、もうパンクしていたと思いますが、間に男性が半分のところ（徳島大学大学院薬学研究科）があったので、少しは救われたかもしれません。女子大学ということ考えたとき、やはり男性と女性が一緒にいるところの教育よりは、女性の特色を生かした教育はしやすいと思います。女性がこれから自立していくべきだという、この大学の立学の精神ですね、それは日本の伝統的なものを生かしつつ自立した女性をつくりたいということであり、この精神で女性を教育していかなければな

らないと思います。男性に従属していることをよしとするようでは、しっかりとした女性
はできないと思います。自立した女性を教育するということは非常に大切であり、武庫川
女子大学ができたのも、そういう目的のためだと思います。

私は、先ほども申しましたけれども、就職した途端に、自分が女性であるということ
を突きつけられました。まず、女性は研究ができないとか、結婚したらやめろとか、せめて
子どもができたらやめろといったことを、具体的に言われながらずっとやってきました。
ただ、それまでの私には、女性という意識が自分の頭の中に全くなかったのですが、就職
した途端に自分が女性であるということ突きつけられてしまって、しかも女性であるか
らという理由だけで、否定されるという場面ですとずっと過ごしてまいりました。

その中でいろいろ考えてきたのですが、やはり女性というのはこの世の中に半分いま
す。この半分の女性が、全部の人類を産んでいるのです。10カ月間は、男性も女性も女性
のおなかの中で過ごします。そして子どもをちっちゃいときから、育てていくというこ
とを考えたときに、女性の力がいかに大切であるかということ、私としては非常に真摯な
感じで受けとめました。

女性がしっかりしてないと、いい国はつくれないと思っているんですね。男性もやはり
女性から生まれますので、母親の影響が非常に大きいということです。そういう意味で、
女性をしっかり教育していく、しかも自立した女性をつくっていくことが非常に大切であ
ると実感しております。

女性が、男性と同じでなければいけないかという点について、私のとらえ方は少し変
わっています。男性も女性も人間としては同じです。しかし、非常に表層のところで男性
と女性には違いがあります。男性は、大まかに言って力があったり、新しいことを考えつ
くのが早かったり、繰り返しを嫌がったりするという特性があります。女性の方は、粘り
強く、同じことを繰り返しても平気です。これは、恐らく子どもを育てるときに必要な能
力であろうと思うんです。そこで日本と世界を考えたときに、男性と女性がそれぞれの特
徴を生かしながら共同してやっていかないと、いい世界はできないと思っております。

先ほど申しましたポーラログラフ討論会というものがあまして、私が非常に困ったと
きに、そのポーラログラフ学会の先輩の女性の先生がおられまして、その先生が励まして
くれたことによって、非常に女性であるということに対して自信を持つことができました。

それから、仕事をしていきますと、子どもをなかなか産めません。そして産んだらやめ
ろと言われて、私は非常に悩みました。文学者でもう亡くなられた芹沢光治良先生とい
う方が、『巴里に死す』という本を出しておられます。私はこの先生に非常に傾倒して
おりましたので、その先生のところにお話に行ったことがあります。そして、非常に女性
として悩んでおりますということをお伝えしました。

そのときに話してくださったのですが、日本はまだ遅れているが、アメリカではどんどん女性が活躍しており、日本も、近い将来そういう時代になるから、頑張るようにということで、キュリー夫人の話をしてくださいました。先生がパリに留学されていたときに、友達がキュリー研究所におられて、そこでキュリー夫人と話す機会があったとのことでした。そのときに、芹沢先生がキュリー夫人に、子どもを育てることと研究することの両方をやられているけれど、どういう気持ちでそうしているのかと尋ねられたそうです。そうすると、キュリー夫人は、研究することも社会への奉仕であるが、子どもを育てることも社会への奉仕であるので、どちらも均等にしているとのことでした。そういうことがありまして、女性の役割というものが、パッとわかった気がしたんです。

そういう意味で、女性であるということがいかに大切であるかということ、それぞれの女性が自覚して、自立した女性になるために努力するということが非常に大切だと思います。そういう意味で、集中的に女子学生に教育できる女子大というのは、非常に効果的な教育のできる場であろうと思っております。

以上です。

〔安東由則〕 ありとうございました。

それぞれ女子大学のよさについて語っていただきましたが、高橋先生の講演の内容ともかなり重複し、関連した視点のあるお話しであったと思います。

高橋先生、今の5人の方の意見を聞かれて、どのような感想やコメントがおありでしょうか。

〔高橋裕子〕 やはり、それぞれの卒業生の方々が、さまざまなターニングポイントでいろいろなメンター（mentor）に出会われて、それで道を切り拓いてこられてきているということを強く感じます。

前回の教育研究所の研究会（2005年12月）でも申し上げたのですが、これからの時代は女子大か共学かという二項対置的な問いの立て方は、もう時代遅れになっています。そして、それぞれのニーズに合った大学に進学する学生たちが増えてきています。そういう中で、それぞれの大学がどのような特色を打ち出していくかが問われると思います。共学大学の中にも、女子大学のような雰囲気をつくっていくことが求められます。女性研究者支援センターも同様なのですが、多くの国立大学、旧帝大系の大学がこういうセンターをつくって女性の支援を始めています。そこで女子大学はさらに女性支援をしていく上で、どのようなことを、改革して進めていかなくてはならないのかが問われているように思います。

先ほどのグレース・ホッパー会議も、同じようなことを提示していると思います。アメ

リカ合衆国においても、女性の参画ということは、まだまだこれからというところがあります。むしろ北欧の方が、女性が先進的な役割を果たしているようです。そういう中で、女性たち自身も、次の世代に対して何ができるのかということ — ご定年が近い先生もいらっしゃると聞きましたけれども — そういう先生が、次の世代のために何ができるのか。武庫川女子大学は、そのような卒業生をリソースとして活用されていて、同窓生が次の世代を引き上げてくださる、そういう牽引力として活用していかなくてはならないと思います。そのような試みが、これからの10代や20代の女性たちの道を、さらに広げていくと思います。今日のパネリストになられた方々は、そのような決意をきっと持っている、そういう卒業生ではないかと拝見いたしました。

会場からの質問

〔安東由則〕 ありがとうございます。

会場の皆様には、今までずっとお聞きいただきましたが、今のパネリストのご意見あるいは高橋先生のコメント、さらには先ほどのご講演も含めて、何かご質問やご意見がありましたら、ぜひ発言をお願いしたいと思います。どなたかいらっしゃいませんか。

よろしければ、お名前を言っていただければと思います。

〔高橋享子〕 武庫川女子大学生活環境学部食物栄養学科の高橋です。私も本学の卒業生で、本学で教員をしておりますので、卒業生の皆様にご質問をさせていただきたいと思います。どなたからでも結構です。

長く内部におりますので、内部のいいところ、あるいはまだ不足しているところも十分理解しているつもりです。しかし、なかなか外からの視点をもつことは難しいように思います。皆さんが卒業生として外から武庫川女子大学の後輩の卒業生を見られ、また卒業生に接しておられて、ここがまだ足りないよとか、ここをもう少し充足したらもっとよくなるのではないかなという点がありましたら、教えていただきたいと思います。よろしくお願ひします。

〔安東由則〕 それでは、本仲さん、お願いします。

〔本仲純子〕 武庫川女子大学の発展というのは、もう端から見ても驚くばかりでございます。非常に時代の波に乗りまして、新しい学科をどんどん立ち上げておられます。そういう意味で受験者も増えていますし、私なんかのころよりもずっと入学するのが難し

くなっておりますので、本当に驚いているんです。私は毎年、「大学ランキング」を見ます。徳島大学を見ますので、武庫川女子大学も必ず見るのですが、ブランド性だとか経営のいいところとか、皆ランキングされているのを見させていただいております。

ただただ驚くばかりなのですが、もし気になるとすれば、学科を新しく立てたときに、その充実度でしょうね。つくったけれど、どのくらい中味が充実していくのか、そこでの教育はどうなるのか、そういうところは非常に興味のあるところでございます。ただ、経営手腕がすごいなということで、本当に驚いております。同じ大学人としても感心するところでございます。

〔安東由則〕 ありがとうございます。
木村さん、お願いします。

〔木村泰子〕 もう今年で大空小学校は創立4年目ですが、毎年、教育実習生がたくさん来てくれます。教育実習生の学ぶ姿を見ていると、本学の教育は素晴らしいと感心しています。大学の授業だけではなくて、授業を基盤に置いて、将来、自分がどんな道を目指し、その道で自己実現を図るため、外へ出ていくまでの期間に何が必要なのかを見極め、そういうかかわりをととても手厚くしておられます。採用試験の面接の練習とか、子どもの前に立ったときのノウハウとか、そのあたりのとても細かい部分での丁寧なかかわりがうかがえます。このあたりについては、私たちの頃はほとんど記憶にないことなんです、今の学生はとっても幸せだと思います。大阪市でも、新任採用をされる武庫川の方々が、ものすごく急なカーブで上昇しながら伸びています。大阪市の教育を支えているのは武庫川の卒業生だと言い切れる状況になっています。

〔安東由則〕 卒業してからも、先生として、大丈夫だということですね。
次に稲村さん、お願いします。

〔稲村和子〕 私は常々、女性の自立というのは精神的な自立、それから経済的な自立、そういったものがあってのことだと考えております。

その中で、一般の女子大生も含めてなのですが、県庁には大卒の若い女性がたくさん働いています。

アルバイトの人たちに、グレードアップするために公務員試験を受けてみないかと声をかけてみても、自分の今の生活が満ちたりているからか、そういう暮らしの方がそこそこの給料ももらえるし楽だからか、それで欲がないようです。もう結婚したらどうなるかわからないしと言って遠慮されます。

学校としては体制を整えていただいていると思いますけれども、学生さんたちに自分の将来を見据えてほしいと思います。公務員になってから、なぜ私がやめずに今までいるかと言うと、やはり将来、退職したときに自分の生きていくお金が欲しい、それだけです。そういったところも見据えて、就職を真剣に考えてもらいたいと思います。

パネルディスカッションからの示唆

〔安東由則〕 ありがとうございます。質問をいただいた高橋享子先生、よろしいでしょうか。

もっといろいろお話を伺いたいのですが、時間となってしまいました。卒業生の方にいろいろ語っていただいて、本当に豊かな資源といいますか、リソースをお見せいただきました。それらを、私たちはこれからの大学教育に役立てていきたいと思っています。今回のシンポジウムは一つの序幕でありまして、まだまだこれからお聞きすることがいろいろあると思いますので、皆様方にはこれからもご協力をよろしくお願いいたします。

今日は短い時間ではありましたが、女子大学での学びを考えていく上で、非常に重要だと思えるさまざまな経験であるとか、観点が語られたと思います。それは、もちろん高橋先生のお話を含めてであることは申すまでもありません。あえてそれをまとめることはしませんが、できないとは思いますが。今日の講演や議論を通じて会場の皆様が大切にしなければいけないと感じられたことを、これからどう生かしていくのかということ、考えていただければと思います。

女性教育の大切さや女子大学としての視点といったことを真剣に捉えて、それをどう生かしていくのかについては、本大学の教職員が本当に真剣に考えて取り組んでいくべき課題であり、それができるかどうかは私どもの姿勢にかかっていると思います。

本日、コーディネーターをという役割を引き受けさせてもらい、皆さんの意見をお聞きしておりまして、最後にまとめではありませんが、簡単に感想めいたことを言わせていただきます。

まず一つは、学生の学びを高めるための大きな可能性の一つとして、卒業生という存在の大切さということを改めて感じました。本当に短い時間でしたけれども、皆さんには、卒業生ならではの視点、あるいは卒業生ならではの率直さで語っていただいたと思います。高橋先生のお話にもありましたように、女性の社会進出というのは、まだまだ日本では非常に厳しい状況にあります。女性が自立して生きていくためには何が必要であるのか、ということを生きたちに伝え、そして励ましていこうとするときに、このパワーのある卒業生の皆さんの存在が非常に大きいと思います。パネリストの皆さんを初め、卒業生とどう連携してこれからの学部学生の学びを豊かにしていくのかということが、一つの大

きな課題であると考えます。こうした試みを今回だけにしないで、これからも引き続いて卒業生と連携をとりながら、どういうふうに豊かな学びに結びつけていくのかということが一つの課題だと考えます。

もう一つは、逆の方向です。つまり、一生を通じて女性の学びをサポートしていくための女性大学としてどう取り組んでいくのかという課題です。どのように、卒業生に学びのチャンスを開いていくのかということです。卒業後も学びのチャンスを本学で持ってもらうとか、さらには、頑張っている卒業生に対してどう励ましていくのか、どう勇気づけていくのか、あるいはどのようなメッセージを送り続けるのかということを考え、実行していくことが大事だと思います。これは高橋先生のご講演でも述べられておりましたことであり、とても重要な課題です。

武庫川女子大学では、今、「その先が見える大学」をキャッチフレーズにしています。その先を見据えて、女性たちをエンパワーしていく、あるいは励まし続けていくサポート体制をどうつくるのかということです。つまり、大学の中にいる今の女子学生をどうエンパワーするのかを考えるとともに、卒業生に対してもどういうふうに励まし続けていくのかということにも目を向け、双方向で取り組んでいく必要があるかと思います。女子大学とその卒業生が相互に協力できるにはどのような体制づくりが必要かを考えることの重要性を指摘して、本日のパネルディスカッションを終わりたいと思います。

パネリストの5人の卒業生の皆様、講演に引き続きましてコメンテーターとして参加いただきました高橋先生、そして現役の2人の学生の皆さん、どうもありがとうございました。貴重なご意見を頂き、心より感謝いたしております。